

大谷大学所蔵のヘルンレ文庫について

島山奈緒子¹⁾, 三鬼 丈知²⁾, 猪飼 祥夫³⁾, 多田 伊織⁴⁾¹⁾ 関西医療大学, ²⁾ 大谷大学, ³⁾ 北里大学, ⁴⁾ 大阪府立大学

大谷大学には19世紀から20世紀にかけて生きたドイツ人学者、ヘルンレ (Hoernle, Augusts Frederic Rudolf, 1841–1918) の蔵書が所蔵されている。

ヘルンレは1841年にインドのアグラで生まれた。1848年にドイツのヴュルテンベルク (現在のバーデン=ヴュルテンベルク州の東北部) で教育を受けた。その後、スイスのバーゼル大学で学び、1860年にロンドンに移りロンドン大学にてゴルトシュテュッカーにサンスクリットを学んだ。1865年にインドのメーラトに牧師として送られた。1870年ベナレスのジェイナーラヤーン大学の教授となり、1877年にカルカッタのカテドラルミッションカレッジ、1881年にマドラサ大学の学長を歴任した。1899年に学長を辞してオックスフォードにて余生を送り、1918年にインフルエンザのため亡くなった。

ヘルンレは21年の歳月をかけてパワー文書の研究に取り組んだ。その成果はパワー文書の英訳と解説からなる『パワー文書考』3巻として結実する。

パワー (Bower) 中尉は1890年クチャに派遣され、その地で発見された樺皮に書かれた文書を入手した。同年9月に文書をベンガル・アジア協会の会長を務めていたウォーターハウス大佐に送った。ベンガル・アジア協会で解説をしようとしたが、失敗に終わった。ベンガル・アジア協会言語学部の幹事であったヘルンレは休暇よりインドへ戻る船上にてパワー文書の存在を知り、インドに戻り次第、文書の閲覧を求め、研究を開始した。

大谷大学に所蔵されているヘルンレの蔵書はパワー文書の解説に使用された工具書並びに参考書類、解説のために作成したパワー文書の複製も含まれており、サンスクリット語やパーリ語の文法書や辞書、英語やドイツ語にて書かれたインド医学の研究書など、考古学・言語学・歴史学・仏教・ジャイナ教・医方薬物その他に及んでおり、特に医薬に関するものはその6分の1にも及ぶ。

ヘルンレの大量の蔵書が大谷大学に所蔵されるようになった経緯は、大谷大学の教授であった泉芳璟が1920年にケンブリッジの書肆ヘッファーにて700冊余りのヘルンレの蔵書を発見し、すぐさま購入したことによる。泉はヘルンレ文庫をよく研究したが、その後この宝の山はあまり顧みられることなく、長い間世に出ることはなかった。

まとまった目録も作成されておらず、利用の便もはかられていない状態で大谷大学に所蔵されてきたが、大谷大学の医学書を整理する過程でパワー文書とヘルンレ文庫の存在を知った猪飼祥夫が、大谷大学の助教となった三鬼丈知と発表者である島山奈緒子に声をかけ、「ヘルンレ研究会」を立ち上げた。ヘルンレ文庫の豊富な古代インド医薬に関する資料の翻訳を見据えた会ではあったが、まずは文庫の目録を作成するところから着手した。会を重ねるごとに様々な専門を持つ参加者を増やし、三鬼丈知 (代表)・猪飼祥夫・島山奈緒子・伊藤裕水 (京都大学)・大島啓輔 (有鄰館)・坂井里奈 (神戸学院大学)・樽井智彦 (太子道鍼灸院)・多田伊織・石堂智行 (尚雲堂鍼灸院)・鹿島洋志 (かしま鍼灸治療院)・米田宣幸 (京都工芸繊維大学) などが目録作成に携わった。特に樽井の参加により目録のデータ化が飛躍的に進み、大谷大学図書館の図書カードの電子化が終了した。現在は現物との校合を残すのみである。

今後もヘルンレ文庫の整理を進め、古代インド医学史の新たな側面を明らかにしていきたい。